

北京日本人学校 多田賢一

皆さんお元気でお過ごしでしょうか。中国も 4/28～5/1 が連休で日本並みではありませんが少し休養したり、出かけたりできました。4月はいろいろ忙しいことがたくさんあり、ほっとすることもなく過ごしてきましたので、この連休には大いに救われました。

4月11日には、北京大使館の全権公使を来賓に迎えて入学式があり、20日には保護者会総会と続きました。日々、児童生徒の送迎にも気を遣い、さらに脱北者対応の訓練もあり、その上、会議に続く会議で、教職員ともどもくたくたになりました。



そんな中、いくつか北京ならではの行事に参加したり、観光に行ったりしました。そのことをいくつか紹介します。まず、4月20日に日中国交正常化40周年記念植樹祭に行きました。北京市郊外の広大な敷地の一部が日中国交記念広場になっており、日本人学校の子供たちと桜の木を植えました。手で持てるような小さな木かなと思っていたら、ご覧のような4m近い大きな木でした。

スコップで土をかぶせるのに大汗をかきました。驚いたのは、市の中心部から約1時間の現地まで、8台のバスがノンストップで移動したことです。市や国が主催する行事では、交通を遮断して参加者を運ぶようです。車1台通らない高速道路は異常に感じました。

4月24日に、6年生の社会科校外学習がありました。北京でも珍しいというくらいの大雨になり、ずぶ濡れになりましたが、それでも、楽しく巡りました。行先は、日中戦争の始まりとなった盧溝橋と人類の始まりといわれる北京原人が展示されている周口店です。一見の価値はありました。



連休の4月30日には、今年度派遣の教職員12人とその家族で北京1日観光をしました。最初に目指したのは、やっぱり定番の「万里の長城」です。いくつかある登り口の中で、居庸関の長城を登りました。車も人も大ラッシュアワーで大変でした。

その後、北京市内に戻り、天壇公園や故宮を眼下に見られる景山公園に行きました。牡丹の花が満開に咲き乱れていました。それにしても、どこへ行っても人と車が多いのは中国ならではのです。歩き疲れはしたものの、よい休養となりました。また、月1回のペースで、中国の様々な様子や面白い事柄を「北京だより」として送信していきたいと思います。



居庸関万里の長城にて



天壇公園にて



景山公園より見た故宮



満開の牡丹

北京日本人学校 多田賢一

皆さんお元気でお過ごしでしょうか。北京の春はあっという間に終わり、日中はほぼ 30 度を超える夏のように暑い日々です。でも、ありがたいことに湿気が少なく（平均 30%程度）、蒸し暑さは感じません。



「北京南駅待合」

そんな中、5月16日から公務（中国地区校長会）のため蘇州へ行きました。早く行くための交通手段は、今までは飛行機しかありませんでしたが、時間的にあまり変わらないため、最近開業した高速鉄道（中国版新幹線）で行きました。去年の大事故が脳裏に浮かび、少し気にはなりましたが、乗っていくことにしました。平均時速約 300 kmで 5 時間、1500 kmの旅です。

まず、高速鉄道専用の出発駅、北京南駅へ向かいました。現れたのは、国際空港と見間違えそうな巨大な駅舎でした。中には、空港のごときゲートがいくつも設けられていました。待つこと 30 分、パスポートチェックの後、16 番ゲートより下に下り、プラットフォームに立ちました。十数本のプラットフォームには、人影がまばらでしたが、次第に人が増え、今回乗車する列車 G123、「和諧号」CRH16 両編成が入線し、乗車しました。



「和諧号」CRH

車体や車内の様子は日本の新幹線と変わりなく、1 等車ということもあって大変ゆったりしていました。10:53 に発車し、車窓に映りゆく風景に目を移しました。列車は、天津・済南・徐州・南京・蘇州といった主だった都市を経由して、上海虹橋駅に行きます。時々、低い金属音がするのは気になりましたが、音や振動はほどほどで、車内は快適でした。



「座席はゆったり」

車窓から見ていて気づいたのは、この鉄道を新たに建設するために取り壊された多くの家やビル、工場の残骸でした。かなり無理な工事を進めて、この鉄道が出来上がったのだろうと想像されました。しばらく走り、今度は「見渡す限りの麦畑」や多くの集落を次々に見ました。冬の強い風を避けるためか、防風林として植えられたポプラ並木が道路に沿って植えられ、整然とした美しさを感じました。



その内、妙なものに気が付きました。畑の中に小さな盛り土がいくつもあり、中には飾りがつけてあったり、石板が立ててあったりしています。何か収穫を祈るためのおまじないかと思いましたが、どうもお墓のようです。徐州辺りから、それらは見当たらなくなり、代わりに、畑のふちに小さな祠がいくつも建ててあるのが見えました。そして更に、南京を過ぎるとそれもなくなり、山の斜面に整然とした墓地ができていました。



「時速 304 km の表示」



「畑の中の小さな盛り土」



「畑の右ふちに小さな祠」



「山の斜面に整然とある墓地」

家々の造りは、前半の地域では、乾燥して干上がったような土色煉瓦の家がよく見られました。しかし、後半の地域では、屋根瓦を載せた瀟洒な造りに変わっていききました。田畑も小麦畑からい

つの間にか水田に変わり、揚子江を渡った辺りから水辺の景色を多く見かけるようになりました。たった5時間の旅でしたが、気候風土の違いやそれによる貧富の格差等がよくわかりました。また、広い中国のごく一部分の旅でしたが、飛行機による点から点への旅に比べ、鉄道は線の旅であり、車窓から目にする風景に多くの物事を感じたり、考えたりでき、とても良い体験になりました。



「大河、揚子江を渡る」 「乾燥した土色煉瓦の家」 「屋根瓦を載せた瀟洒な家」

蘇州北駅には、15:57に到着しました。蘇州は、私がかつて3年間過ごした街です。数日間滞在した中で、世界遺産の街並みは変わりませんでしたが、その周辺の変容ぶりにはびっくりさせられました。たった4年ですが、今の中国では、あれからもう4年です。高速鉄道も街並みも当たり前のように変化しています。皆さんも、そんな中国をぜひその目でお確かめください。



「数多い煉瓦工場の煙突」 「揚子江を渡った辺りの水辺の景色」 「田植え前の水田」



「高速鉄道専用の蘇州北駅」 「蘇州の観光スポット山塘街」 「間もなく取り壊される蘇州日本人学校現校舎」



「私が初代校長として勤務した蘇州日本人学校は、間もなく現校舎から新校舎に移り、多くの思い出とともに校舎はなくなります。壊される前に、蘇州を訪れ校舎や懐かしい人々に出会えたことは、天の恵みのようでした。左の私が作詞した校歌の銘板にも出合うことができ、感無量の思いでした。」

次回は、5月28日から四川省成都方面へ、中学部修学旅行で行きます。そのことをお伝えしたいと思います。

北京日本人学校長 多田賢一

皆さんお元気でお過ごしでしょうか。北京の夏は、本当に暑いです。先日、運動場の温度計を見てぎょっとしました。午後2時で38度になっていました。あと2度上がれば、40度の大台でした。でも、正門の警備員は大した暑さでもない、事も無げに言っていました。



万人の大都会でした。

5月29日、中学部1・2・3年生135人が、3泊4日の修学旅行に出発しました。北京空港より約2時間45分、行き先は四川省の省都、成都です。行く前は、北京に比べたら小さな田舎町だろうと思っ



(成都空港) 空港から目的地の大熊猫(パンダ)繁殖基地までの約1時間、現地ガイドの話に耳を傾けました。それによると、2008年の四川大地震は、四川省に住む人々の生き方までも変えてしまうほどの大きな出来事だったそうです。そのため、成都に住む人々は、いつ起こるかわからない地震で死ぬくらいなら、我慢しないで、今ほしいものは手に

(成都市中心部) 入りたいと思うようになったそうです。ここ数年、自動車や家電製品等が飛ぶように売れているそうです。それでいながら、蒸し暑い土地柄、元来あくせく働くことはあまり好まず、昼食後の昼寝は当たり前にもなっているそうです。車窓を見れば、それを証明するがごとく、様々な国の車のディーラー店が軒を連ねるように建っていました。

最初の目的地の「大熊猫繁殖基地」は、郊外の丘陵地にありました。70頭を越すパンダが飼育されていると聞き、1頭でも大行列ができ大騒ぎになる日本の状況を考えると、ゆとりのウオッチングができると私も生徒達も期待しました。しかし、当日は天気がよく、30度を越す気温になったため、暑さに弱いパンダは、ほとんど冷房の効いた飼育舎に入って出てきませんでした。広い屋外飼育場には、おじさん体型の大きなパンダが1頭、のそのそ動いているだけでした。その他、生徒の指差す(大きなパンダ)樹上に、少し小柄なパンダが、木の枝をベッドに仰向けになっていました。また、一部公開の冷房飼育舎で、子パンダ2頭がガラス越しに見られました。何でも、昨日までは天気が悪く涼しかったので、屋外飼育場には多くのパンダが見られたそうです。真に残念です。天気がよいのもよし悪しです。ただ、その夜の食事では、四川名物、麻辣この上ない麻婆豆腐がおいしく頂きました。



2日目は、修学旅行の最大目的である現地校交流(日中国交正常化40周年記念事業)を行いました。相手校は、生徒数6,000人の華陽中学で、日本でいうところの中・高一貫教育の学校でした。



(楽隊演奏の中歩く) 到着と同時に楽隊が現れ、歓迎の曲が流れる(ステージでソーラン)

中、式典が行われる運動場に案内されました。まるで陸上競技場のようなグラウンドの正面にステージがあり、横断幕には、歓迎の言葉と「友好交流活動」の名称が大きく書かれていました。このように、にぎやかで派手なことになるとは予想を

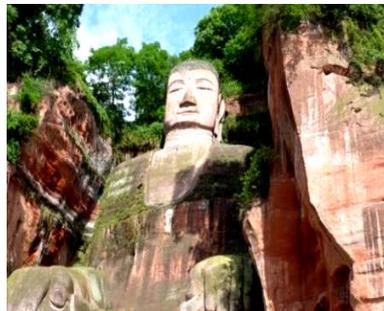


していませんでした。まず、ステージ上で、市の幹部と学校長が挨拶をされ、私が北京日本人学校を代表して挨拶（日本語）をしました。その（生徒同士の交流）後、生徒同士の挨拶と出し物（楽器演奏や合唱、踊り）を相互にやりました。



（日中友好親善交流記念写真）

それにしても、中国ならではの歓迎には驚かされました。生徒同士の交流は、英語と中国語でやったそうで、かなり打ち解けて楽しかったようです。終わりに撮った集合写真は、その人数と段の高さに、生徒が落ちはしないかとはらはらどきどきしました。そして、交流の成果を胸に次なる目的地、樂山市へ向かいました。



樂山市には世界遺産の樂山大仏があり、山に登って高さ 71m、肩幅 28m、頭部の高さ 14m、東部の直径 10m と（船から見上げた大仏）

いう巨大な大仏を上から見下ろし、さらに船に乗って、下から見上げて鑑賞しました。

（大仏の頭をバックに記念撮影） 3日目は雨の中、標高 3,099m の峨眉山に登りました。バス→徒歩→ロープウェイ→徒歩で、石楠花の咲く参道を通り、頂上に到着しました。頂上にある、黄金の高さ 40m の象に乗った巨大菩薩は、霧雨に霞み下部の象だけが確認できました。ただ、油断大敵、高山病に気をつけると生徒達に言っていた私自身が高山病にかかり、下山するまで頭痛とふらつきに悩まされました。



（参道の石楠花）

4日目は、三国志に出てくる蜀漢王劉備玄德や諸葛孔明を祀る武侯祠へ行きました。人気の高い三国志の中でも、特に劉備の家臣には英雄豪傑が多く関羽（黄金の巨大菩薩）や張飛・・・といった名将の木像や書、そして記念の物品がたくさん置いてあり、時代を超えて当時の息吹が感じられました。改めて、三国志が好きになりました。昼過ぎ、数々の思い出を胸に、空港へと向かいました。



ところで、旅行中何度も子どもの団体旅行を不思議がられました。中国では修学旅行の習慣はなく、学校を離れての学習活動すらあまりないということでした。また、自主的に食事の後片付けをしていると、厨房のコックさんまでもが来て、珍しそうに眺めていました。

四川での4日間、普段と異なり小学生のいない日々、彼ら中学生は本来の中学生集団に戻り活動できました。毎夜の反省会では、行動面の反省と改善に終始し、生徒達による自己管理と自主管理の甘さを露呈しました。しかし、彼らにとってはそのことが、逆に、とても素晴らしい体験になったと思います。



北京日本人学校ならではの中学生全員参加の修学旅行は、贅沢といわれ

るかもしれませんが、中3をリーダーとした集団作りと相互の信頼関係を広げ、深める、大きなきっかけになったと思います。この修学旅行の思い出 **(劉備玄德像)**  
は、長い人生の中の光り輝く一瞬として、彼らの心の中にいつまでも残ることでしょう。 再見！

皆さんお元気でお過ごしでしょうか。北京日本人学校では 8 月 22 日より学校が始まりました。640 人の子ども達が登校し、静かだった学校が久しぶりににぎやかになりました。ただ、中国内では各所で反日デモが発生しており、油断のできない日々です。校内では 9 月 15 日の運動会に向けた練習がスタートし、応援団のにぎやかな声も校内に響き始めました。また、暑かった北京の夏は、少し涼しくなり、朝夕はヒンヤリとしてきました。

さて、北京といえば、万里の長城と故宮、そして北京ダックが思い浮かぶと思います。そんな北京でも、このところ物価が少しずつ上がってきています。それでも、タクシーは初乗り 10 元（約 130 円）で、近回りは全てこの金額で行けます。かなり長時間乗っても、50 元（650 円）くらいです。メーターがあり、領収書がもらえるので、ぼられることもありません。ただ、運転手は時間勝負で稼いでいるので、かなり無理をして走ります。乗っていてヒヤヒヤすることがたびたびあり、先日も行き過ぎたのか、高架道の測道を逆走してくるタクシーに出会いました。

ところで、タクシーに輪をかけたように安いのが、市民の足、公共バスです。中国では公共汽車（ゴンゴンチャーチャー）と呼んでいます。北京市内は 12 公里（キロメートル）以内なら 1 元（13 円）でそれ以上だと 5 公里（キロメートル）毎に 0.5 元で行けます。

イーカートンという名称のバスカードを使うと半額以下

となります。これは、地下鉄にも使えるので便利です。イーカートン 公共汽車（ゴンゴンチャーチャー）

ただ、この公共バスには時刻表がなく、始バスから終バスまで適当に走っていて、同じ路線のバスが 3 台連なって来るかと思えば、30 分間 1 台も来ない時もあります。乗る時はカードをチェッカーにタッチさせ、ピーと鳴ったら OK です。長距離のバスなら、降りるときにもう一度チェッカーにタッチさせて降ります。どんなに遠くまで乗っても、イーカートンを使えば、市内なら 1 元程度です。

先日、近所のバス停から乗れる 12 路線のバスの内、

最も長い距離を走る 707 番に乗りました。30 駅 車内のチェッカー

を約 1 時間 45 分かけて終点の停留所まで行きました。夏の炎天下、エアコンのないバスの中は、地獄のように暑く感じました。しかし、降りる時のカードによる支払いは、トータルで何と 0.8 元（約 10 円）でした。ただ、ここからまた自宅まで、炎天下、熱地獄のバスに乗るのかと考えるとぞっとして、途中のバス停で空調バス（エアコン付きのバス）に乗り換えました。ちなみに、空調バスは、運賃が少し割高になっています。

四国とあまり変わらない広さの北京市では、1000 路線以上の公共バスが走っています。イエローカラーの普通サイズのバスに混じって、蛇腹でつながったロングサイズや二階建てのバスも目につきます。2000 万人を超える人口を抱えた北京市ですから、こうでもしないと、大勢の乗客をさばききれないのかもしれないかもしれません。

この次は、郊外に延びる万里の長城に向けて走るバスに乗り、往復 2 元の旅に挑戦したいと考えています。再見！



## 「新たな年に新たな期待を」 (反日の嵐を通して) 北京日本人学校 多田賢一

中国では、昨年夏以降の反日の嵐で、『来年こそは、よい年でありますように』と祈らずにはおられません。中国に暮らす日本人は皆、そんな思いのする1年間ではなかったでしょうか。特に9月以降の日中関係の悪化によって受けた悪い影響は、北京日本人学校も他人ごとではありませんでした。反日の嵐によって学校は3日連続の臨時休校、国旗の掲揚もできず、日々緊張を強いられました。

運動会は1週間延期になった上、北京市警察の指示で保護者は入場できず、子供たちだけの運動会開催になりました。小6の修学旅行も1ヵ月延期になった上、目的地の上海は危険との判断から中国国内を諦め、東京都内への旅行となりました。その他、現地校との交流学习、現地社会見学等は軒並み延期や中止となりました。特に、長年続いてきた現地校との交流学习の再開は、日中関係の改善がなければ、ほとんど難しい状況になってしまいました。



ところが、そんな中、開催が中止・延期になっていた、24年の伝統をもつ「第25回中学生中日交流弁論大会」が、相手校からの連絡で12月15日(土)に急きょ開催されることになりました。開催は、無理と思われていただけにびっくりするとともに、準備や練習をしてきた日本人学校の中学生は大喜びしました。

当日12月15日、北京日本人学校の弁士6名は中国語で、北京市月壇中学の弁士は、日本語でスピーチを行いました。さすがに選ばれて来ているだけあって、どの生徒も素晴らしいスピーチでした。終わってからの審査は、評価が分かれ選ぶのに苦労しました。

日本側は、「礼に始まり、礼に終わる」を演題としてスピーチした中2の男子生徒が、また、中国側は、「自転車に乗りながら考えたこと」を演題にスピーチした中2の女子生徒が、優秀賞に輝きました。他の各5名は優良賞となり、すべての弁士に表彰状とトロフィーが贈られました。

スピーチ内容は、お互いの文化や習慣、そして自然保護といったことが主として取り上げられていました。その語りからは、相互に尊敬し合える平和な社会をつくることを目指したいとの強い思いが感じられました。

今回、生徒同士の交流活動も行われ、日中の文化・スポーツ・美術・音楽・その他趣味の分野で交流しました。日中の来賓、両校の一般生徒、学校関係者、弁士の保護者家族等合わせて約400人が参加した今大会は笑顔があふれ、これまでにないくらい盛大なものとなりました。

なぜこのように早く、盛大に開催できたのか。その裏には、25年間続けてきた伝統の灯を消してはいけないという日中学校関係者の強い思いがあったのと、相手方、北京市の中学校長の熱い思いと市政府への働きかけがあったからに違いありません。同じく中止が決まりかけていた11月24日開催の日中交流子供将棋大会も、同様の事情を抱えながらも盛大に開催されました。

政治経済については、まだまだ難しい点が多いと思いますが、教育文化の面では、日中の当事者間の熱意で交流活動やイベントの開催が可能になってきているのかもしれない。これから大いに期待できると思います。

ところで、普段の生活でも、反日の嵐の後、多々長期間無理を強いられることがありました。①外出時に日本語を喋らない。②日本人同士で集まらない。③日本人かと聞かれたら、「違う」と答える。等です。

実際、日本人とわかると、タクシーに乗車拒否をされたり、露骨に嫌な顔をされたりしました。一部のホテルやレストランでは、日本人お断りの掲示がしてありました。ただ、幸いなことに、北京市内では、1件の傷害事件はなく、比較的安全に過ごせました。年末になって周りを見回すと、あの熱く燃え上がった反日の嵐は、氷点下の寒さと例年にない降雪の多さのためか、急に冷めてしまったかのように静かになってしまいました。油断はできませんが、日々穏やかに過ごせています。

今年もあとわずかとなりました。皆様、よいお年をお迎えください。 再見！

## 「新たな脅威」(大気汚染)

北京日本人学校 多田賢一

今日の大気汚染レベルはどうか。毎朝、目を覚ますと窓の外を見て、パソコンで「北京の大気汚染状況」を開くのが、このところの日課となりました。1月12日(土)の数値は特に異常でした。朝から500を超え、昼ごろには700を超えました。これは、日本の安全基準値の20倍を軽く突破しています。外に出るのは、自殺行為と揶揄されるほどの大気汚染です。この日は、北京市当局から市民に対して、外出自粛の通達(メールによる一斉配信)と煙を排出する工場に対して、操業中止の命令が出されました。



それにもかかわらず数値はどんどん上昇し、夕方には900を超え観測最高値を記録しました。私は、この日病院の予約があり、外出せざるを得ませんでした。石炭を燃やす臭いとのどを刺激する空気です。二重のマスクをしていても、咳と痰に



(大気汚染300レベルの日)に悩まされました。病院に着いて、いつも(大気汚染のない日)の治療に合わせて呼吸器を診てもらい、咳と痰に効く薬をもらって帰りました。休日の土曜日なのに歩く人の姿は少なく、視界もすこぶる悪くしていました。学校の授業日でなくて、幸いでした。

日本人学校では、汚染対策としてアメリカ大使館が1時間おきに発表している大気汚染レベル(PM2.5の微小粒子状物質数)によって、児童生徒の屋外における活動基準を設けています。200レベル未満は、数値に注意しながら屋外活動をし、200レベルを超えると1時間以内の時間制限と呼吸数が増える激しい運動は避け、呼吸器等に問題を持つ子供は屋内待機の措置を取ります。300レベルを超えると、屋外の活動をすべて中止します。また、すべての教室と部屋に空気清浄器を設置し、室内の空気浄化にも努めています。

先日、大使館主催の「大気汚染についての説明会」がありました。経済担当の専門官から、「北京における大気汚染の現状」を、医務官からは、「大気汚染に関わる健康への影響と対策について」の講話がありました。この説明会は1回のみで開催でしたが、参加者が多すぎて入りきれず、翌日もう1回開催されました。私は、そちらに参加させてもらいました。

説明の中で知ったのは、北京だけではなく、大気汚染は中国全土に広がっており、年々ひどくなる一方だということでした。また、北京は三方を山々に囲まれた盆地状の地形になっており、風がなければ汚染された空気がたまりやすくなっているとのことでした。さらに、霧が発生すると濃縮されたようになり、よりひどくなるそうです。そして、工場の煙や年々増える車の排気ガスが主原因で、冬場の家庭の暖房の煙が、大気汚染に拍車をかけているそうです。

続いて健康面の話では、呼吸器系の病気で、市内の病院は、患者が激増しているとのことでした。学校でも咳をする人が増えており、子供たちにも影響が出ています。この大気汚染の微小粒子PM2.5は、肺呼吸によって血液に取り込まれ、体内のあらゆる所へ運ばれていくそうです。特に、脳に達すると脳障害や脳血栓等の誘引物質になるそうで、特に、小さな子供や高齢者にはよくないそうです。これの予防策は、①外へ出ない ②外出時はPM2.5微小粒子をカットするN95マスクを着用する ③室内では空気清浄器を常に稼働させておく の3点でした。

目に見えない放射能に比べれば、スモッグとなって見える点で、まだましかもしれません。しかし、健康に対する影響は、長く住み続ければ住み続けるほどリスクが大きくなるようなので、個人的にも気になるところです。今後は、学校運営に絡めて上の3点を遵守し、児童生徒の健康を守るよう教職員共々、努力していきたいと思えます。

たかが空気、されど空気、命の根源でもあるこの大切な大気を日中で何とか協力して、1日も早くクリーンにしてほしいものです。最悪の大気汚染で人々がバタバタ倒れることのないように。再見!